



コスモ・スワール うすだ

一人一人が輝き つながり 未来を拓く

願いを編み直す、私たちの運動会

校庭ににぎやかな声が戻ってきました。運動会の特別時間割が始まり、子どもたちの身体が少しずつ、しかし確実に熱を帯び始めています。

今年の運動会スローガンは、「一人一人が全力で諦めず、協力して楽しむ運動会」

子どもたちが自分たちの関係性の中で悩み、選び取った言葉たち。この等身大の並びを見つめていると、そこには、大人がつい見落としてしまいそうな子どもたちの切実な願いと、学校という場所だからこそ育まれる尊い姿が浮かび上がってきます。

「みんなが主役」そこには、「足の速い子、得意な子だけが拍手を浴びる運動会にはしたくない。」という、子どもたちなりの強い意志と他者への優しさがあります。足がすくむような苦手さをもつ子も、練習で思い通りにいかず立ち止まってしまう子もいます。それでも「諦めず」と言葉を重ねることで、子どもたちは結果の優劣ではなく、「自分の限界に挑む過程そのものの価値」に光を当てたのです。

「全力」や「諦めない」は、ともすれば個人の物語で終わってしまいます。しかし、子どもたちはその先に「協力して」という言葉を繋ぎました。一人では越えられない壁も、仲間が声をかけてくれるから、もう一步を踏み出せる。クラスや仲間という社会の中で、時にぶつかり、時に手を取り合う関係性があるからこそ、孤独な努力は「つながり」へと変容します。そして、結びにある「楽しむ」。これは単なるお祭り騒ぎの面白さや盛り上がりではありません。全力を尽くし、仲間の痛みと共に共感し、共に支え合ってゴールした先にしか待っていない、深い「達成感としての楽しさ」です。「いろいろあったけれど、みんなとだから楽しかったね」と最高の笑顔で終わりたい、それが、この運動会スローガンに込められた子どもたちの願いです。

私たち大人は、つい「勝ち負け」や「順位」という分かりやすい結果で物事を測ってしまいがちです。しかし、子どもたちがこのスローガンに込めた本質は、そんな大人のパッケージ化された価値観をはるかに超えています。「順位がどうであれ、僕たちは本気で関わり合い、お互いを支え合いたいんだ」という、関係性を求めているのです。学校という、多様な他者がひしめき合う場所だからこそ、この「共感」と「連帯」の姿が育まれます。

保護者の皆様、どうかこれからの練習、そして運動会当日、子どもたちの「順位」ではなく、その子が「どのように仲間と関わろうとしたか」「自分の何に挑もうとしたか」という、内面の輝きを見つめてあげてください。大人の物差しで測るのではなく、子どもたちの生み出そうとしている価値に、共にそっと寄り添っていただければ幸いです。温かいご支援とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。私たちも、一人一人が自分の弱さと向き合いながら一步を踏み出す、その泥臭くも美しい葛藤の姿を、結果だけで評価せず、過程に寄り添い見つめていきたいと思えます。



地域に包まれ、響き合う学びの場で

先般、臼田ライオンズクラブの皆様より、計 10 張もの立派なテントをご寄贈いただきました。ライオンズクラブという団体は、単に社会へ奉仕するだけでなく、「今、ここに生きる仲間を地域全体で支えよう」という強い紐帯(ちゅうたい)を持った方々の集まりです。その温かな眼差しが、この度、私たちの学校へと注がれました。

この寄贈にあたり、本校では全校児童が一堂に会し、さらには市長にもご来校いただいて、贈呈式が挙行されました。

体育館に広がったのは、厳かで、それでいて確かな温もりに満ちた空間でした。目の前にある真新しいテント、それをお披露目してくださる皆様、そして自分たちの為にと駆けつけてくださった市長の姿。全校児童がその光景をじっと見つめる中で、子どもたちの表情がじんわりと変わっていききました。

会が進むにつれ、子どもたちの間に、小さなさざ波のように感動が広がっていきます。それは単に「新しい道具をいただいた」という物への喜びではありません。市長をはじめ、地域の大人たちが自分たちのために集まり、真剣に向き合ってくれている。その事実そのものが、子どもたちの心に「私たちは大切にされている」という深い安心感と、誇らしさを灯していたのだと思うのです。

学校という場所は、ただ知識を学ぶためだけの場ではありません。全校児童という多様な仲間が集い、同じ空間で同じ感動を分かち合う。そうした営みを通じて、社会の中で生きていくための「心の根っこ」を育む場所です。そしてその根っこは、学校の中だけで閉じては育ちません。

地域を代表する方々や行政のトップが学校に足を運び、子どもたちと直接響き合うことで、学校は本当の意味で「地域の学校」へと成熟していくと思うのです。

早速、今年の運動会の練習から大切にに使わせていただきます。いただいたテントは、日差しなどから子どもたちを守るだけでなく、地域からの温かな抱擁のように、これからの臼田小学校を優しく包み込んでくれるはずです。



それは下駄箱ではなく宝箱

子どもたちが教室へと駆け上がったあとの、静まり返った下駄箱。毎朝、そこには子どもたちの「一日の始まり」が静かに呼吸をしています。

多くの子たちの靴が、下駄箱の縁に綺麗にかかとを揃えて並んでいる中、1つだけ、不思議な入れ方をされた靴がありました。真横に、ちょこんと置かれているのです。「おや」と思って近づいてみると、決して雑に放り込まれているわけではなく、むしろ、愛おしむように、丁寧に真横に向けて置かれているのです。その佇まいに誘われるようにして、そっと下駄箱の奥を覗き込んだとき、思わず胸が温かくなりました。

靴の奥の小さな暗がりに、きらきらとした「宝物」が鎮座していたのです。

そこにあったのは、色とりどりの、様々な形をした葉っぱや石ころたちでした。

大人の目から見れば、決して高価なものではありません。けれど、その子にとっては、通学路や校庭で見つけた、世界にたった一つのきらめきだったのでしょう。「踏んづけたくない。潰したくないから、靴を横にしてスペースを作ろう」。一生懸命に考えて、靴を真横に整えた子どもの姿と、その子の内側にある「何かを愛おしむ心」がありありと目に浮かびました。この下駄箱の光景は、私たちがつい見失いがちな、子どもの育ちの原点を教えてくれていたようでした。

